戦国大名武田氏と石山本願寺

小 笠 原 春 香

はじめに

記』、『甲陽軍鑑』等)、永禄年間に入って両者が軍事的に連携するなど、友好的な関係を築いてきた。(3) 人書札案」戦武四〇一一、『天文日記』等)、信玄・顕如(光佐) 戦国大名武田氏と石山本願寺(以下、本願寺)は、武田信虎と証如(光教)の間で音信が交わされていたほか の正室が三条公頼を父に持つ姉妹であることや(『天文日 (「証如上

推移について明らかにしている。その中で佐藤氏は、 おける一向宗勢力の関係を武田信重から信虎・信玄・勝頼の代に大別して検討を行い、信玄・勝頼と本願寺顕如の外交の 武田氏と本願寺の関係についての代表的な研究として、佐藤八郎氏の論考が挙げられる。佐藤氏は、 武田信玄は戦国大名のうちで一向宗対策が最も寛容かつ友好的であ 武田氏と甲斐国に

積極的に一向宗を自己の政策実現に利用して大きな成功をおさめたと評価している。

たと指摘している。また、 たのが水谷安昌氏である。水谷氏は、北条領国における一向宗勢力が北条氏の対外的戦略によってその立場が変動してい その背景として本願寺と友好関係にあった武田氏と北条氏の同盟 佐藤氏の成果を受けて、北条氏を事例として東国の戦国大名と一向宗および本願寺との関係について検討を行っ 北条氏は初代伊勢宗瑞の代より一向宗を禁じていたが、永禄年間頃よりその規制が緩和されて (甲相同盟) が影響していたと述べている。

考がある。

近年では、

長篠合戦後の織田信長と本願寺の動向を整理し、

同合戦と石山合戦との因果関係を指摘をした金子拓氏の論

戦を全体的な政治状況や諸階層の利害を含めた社会的関係の中で検討を行うべきとし、 正年間に起きた石山合戦を契機に新たな転換点を迎えると述べている。さらに石山合戦については、 動員にも応じないという、 以降から諸大名の行う武力抗争や幕府の軍事行動に対して原則的に不介入の立場を堅持するとともに、 方で、本願寺の外交姿勢を論じた研究として、 戦闘回避・中立の原則に基づいた外交を展開していたことを明らかにし、この原則が元亀・天 神田千里氏の論考がある。神田氏は、 幕府や将軍の動向も含め、 本願寺が天文五年 信長と本願寺との合 諸大名からの門徒 (一五三六) 石山合

戦を段階的に分けて検討している。

この他にも、一向一揆が置かれた政治情勢やそれに対応する本願寺の動向について論じた研究に、 金龍氏は、 距離の関係を維持していたこと、その中で将軍や自立志向の強い加賀門徒衆との関係にも配慮していたと指摘している。 まえた上で本願寺の外交を検討しており、 さらに、 越中一 本願寺の外交を扱った研究として山田康弘氏の論考が挙げられる。 向一揆について論じる中で、本願寺が武田 本願寺が外交的孤立の回避や各地の門徒衆の保護を達成するために諸大名と等 ・上杉間の抗争に巻き込まれたと述べている。 山田氏は幕府 ・将軍や畿内の政治情勢をふ 金龍静氏の成果がある。

関係に焦点をあてた研究は佐藤八郎氏の論考にとどまるといえる。また、 江・三河)侵攻を西上作戦と位置づけて論を展開されているが、近年では信玄の軍事行動に関する新たな見解が示されて 以上のように、 本願寺の動向および外交に関する論考は多数存在する。 佐藤氏は元亀年間における信玄の徳川 しかし現時点において、武田 本願寺間 領国 『の外交

していくこととしたい。また、その中で将軍義昭と諸大名・勢力との外交関係についても考察を加えていく。 そこで本稿では、 武田 ・本願寺間の外交関係の推移を整理しながら、 武田・ 織田間 !の対立の過程を改めて重点的

いることから、

最近の研究成果をふまえた上で改めて検討を行う必要があろう。

すると、八月には長尾景虎が軍勢を率いて信越国境を越え、

たい

武田・ 長尾間の抗争と本願寺

13 間柄にあった。 先にも述べたように、 やがて、 武 武田・本願寺間の関係は軍事同盟へと発展するが、まずその過程について論じていくこととし 田 • 本願寺間 の交流は信 虎 証 如 の代から確認でき、 信玄・ 顕如も正室を通じて姻戚関係に近

ち上杉氏)との対立である。 武田 本願寺が軍事的に協力する契機となったのが、天文二十二年(一五三三) 同年四月、 武田軍が北信濃の村上義清への攻撃を開始し、 から始まった武田氏と越後長尾氏 良 し た。 義清が越後の長尾氏のもとへ逃亡 (n)

第一次川中島合戦へと発展

成功したと述べている。 寺文書」上越二〇五)。 れ 立している椎名氏が、 た軍事行動である。 永禄三年 (一五六〇) 二月、 長尾氏挟撃を目的とした武田・ 長尾軍の侵攻を受けて神保氏は増山城 この件に対し平山優氏は、 景虎は越中に出陣し、 武田氏による策謀を未然に防いだことによって長尾氏は越後の防衛に 神保間の密約の情報を察知し、 神保長職の富山城 (同砺波市) (富山県富山市) へ敗走し、 景虎は四月に越後へ帰還した 長尾氏に伝達したことによって行わ を攻撃した。 これは神保氏と対

そして同年十月、 信玄は北条氏と協力して越後の長尾景虎と対抗するにあたり、 越中一向一 揆との連携を画策した。

史料 武田信玄書状写(「富山県仏厳寺文書」戦武七一三)

大坂へ遣候当方之使者、近日其国へ下着之由、 進陣候間 不得退候、 如只今者、 景虎滅亡必然候、 先度飛脚来候条越山候、 幸御門跡之御下知之旨、 仍長尾上野乱入、 近年申談、 此時神保同意、 自兹、 北条氏康申 向于越後被 既令

干戈候様ニ馳走、 尤肝要候、 猶可有山田口上候、 恐々謹言

十月十七日

一田藤左衛門殿

信選

坂の本願寺に使者を派遣し、その使者が近日中に越中にやってくる予定であったことがわかる。 宛所の上田氏は、 越中一向 一揆の拠点となっていた瑞泉寺 (同南砺市) の僧侍頭である。 冒頭の文言から、 信玄は、長尾氏に対抗す

武田

氏が大

なっていた。この史料は、こうした背景にもとに交わされた書状であり、 神保氏は長尾氏の仲介によって、 係にあることや、 るために越中一向一揆を支援し、その布石として本願寺に協力を求めていたのである。 越中の神保氏が本願寺に同意し、上田氏が長尾氏に敵対することが肝要であるとも述べている。 越中で対立していた椎名氏と和睦したものの、 武田・本願寺・神保氏・越中一 武田氏と結んで長尾氏に敵対するように さらに、 武田・ 北条両氏が同盟関 向 揆が連携し 当時、

て長尾氏に対抗していたことが確認される。

認するとともに、 次に、武田・本願寺間の交渉の様子がうかがえるのが永禄八年 上杉氏への敵対についても言及している。 (一五六五) である。 顕如は武田氏との同盟関係を再

史料二 本願寺顕如条書案 (龍谷大学所蔵 「顕如上人御書札案留」 戦武四〇三二)

鳥子]

対信玄自今以後別而可令入魂事

条々「鳥子」「此御札ニ御判形可給之由望ニテ候つれとも・

Ŀ

上野法橋状有之上ハト (下間頼廉)

・ノ御

理也」

長尾輝虎以如何様之題目懇望候共、 尽未来不可相通事、

已上

越中表之備、

信玄申合可成下知事

三月廿七日

たのである。

三点である。また、ここでも越中での共同作戦について言及していることから、 て本願寺と和睦しようともこれに応じることはないこと、 内容を確認すると、 本願寺が信玄と今後も入魂の間柄であること、上杉輝虎 越中の守備については信玄と申し合わせて下知を出すこと、 (史料上では長尾) がどのような題目をもっ 両氏の連携が越中における対上杉戦を想 0)

定していたことが確認できる

いたと捉えることもできよう。上杉氏という共通の敵を持つことで、武田・本願寺間の同盟は軍事協定の要素を強めてい とって上杉氏は大変な脅威であり、 発展していることを考慮すれば、 外交政策を本願寺がとっていた点に異論はない。しかし、 寺の政策転換の一例として、この顕如書状案を提示している。 を基軸とする対大名外交政策を維持しながら足利将軍や加賀門徒衆との関係に配慮していたと述べており、こうした本願 この史料から山田康弘氏は、外交上で中立的立場をとっていた本願寺が政策を変更して武田氏と同盟したと評価 山田氏は、 金龍静氏は、 本願寺が天文元年(一五三二)の山科御堂焼き討ち事件以降、 本願寺が上杉・武田間の抗争に巻き込まれたと述べている。 本願寺の政策転換は永禄八年ではなく同三年頃から起きていたと捉える方が良いであろ 越中一向一揆を守るためには武田氏との友好関係に頼らざるをえない状況に置かれて 永禄三年段階ですでに武田・本願寺が軍事協力を行う関係へと 山田氏が主張するように、 外交上の孤立を回避するために友好・中立 越中の情勢を考慮すれば、 友好・中立を基軸とする対大名 本願寺に してい

0) 書状を送っている。 永禄九年 (一五六六) になると、 上杉氏の攻撃対象は越中から加賀へと拡大した。それを受け、 顕如は信玄に対して次

本願寺顕如書状案 (龍谷大学所蔵 「顕如上人御書札案留」 戦武四〇三四

「鳥

たのである。

之次第不能申述候、 如芳翰久絶音問候、 抑当秋長尾加州表可相働之由、 弥被加御分別御調略之段、 可為欣悦候、 依申廻之儀、 猶下間上野法橋可申候、 至信越堺、 則御出馬之趣、 穴賢々々、 尤珍重 候、 毎度御入魂

八月廿六日

徳栄軒「甲州武田入道信玄事也」

武田・ 賀の一向一揆は常に上杉軍の攻勢を受けることになっていたため、 向 顕如は信玄に対し、今秋に上杉軍が加賀表まで侵攻するかもしれないので、 揆に対しても敵対の意向を示していたことがわかる。 本願寺間が入魂であることを再確認している。 顕如が上杉氏の加賀侵攻に言及していることから、 永禄三年に上杉氏の越中侵攻が開始されて以降、 その危機を回避するために武田氏との連携が必要だっ 信濃と越後の国境まで出陣するよう要請し、 上杉氏が加賀一 越中お いよび加

越中瑞泉寺の上田氏に対し、次の書状を送ってい 永禄十一年 (一五六八)になると、越中における武田氏の影響力がさらに増すことになった。 永禄十一年四月、 信玄は

史料四 武田信玄書状 (「富山県埴生八幡宮文書」 戦武一二五七)

而雖軽徴候、 金蘭進之候

右衛門大夫開運候之様二、 金山逼迫之由候之間、 近日為後日、 御調略簡要之趣、 向于越後令出勢候、 可預馳走候、 然者任于 大坂 恐々謹言、 御内儀、 以長延寺申候、 此時依貴寺御肝

信玄

(花押

卯月六日

Ŀ

田石見守殿

、く上杉氏に帰属していたが、 頭にみえる「金山」とは、 永禄十一年になると武田氏に味方し、上杉氏から離反した。「金山逼迫之由候之間」とある 越中松倉城 (富山県魚津市) の支城である。 松倉城主は椎名康胤であり、 神保氏と敵対す

禄十二年

(一五六九) に開始され、

元亀二年に椎名氏が松倉城から敗走するまで続いた。

実現できたものと考えられる。

213

申し述べるとあり、 ことを察知し、 揆 に椎名氏への支援を求める中で、 離反した椎名氏が上杉氏の脅威に晒されている状況を示している。 越後に出陣する予定であることを上田氏に伝えたのである。 瑞泉寺が椎名氏に味方するよう要請している。上杉氏の越中侵攻を想定し、 本願寺との協力関係を有効に活用していたのである。 信玄は、 本願寺の意向につい 金山が上杉軍に攻撃される恐れ 上杉氏による越中侵攻は永 信玄は瑞泉寺 ては使僧の長延寺実了が (越中 がある 一向

的とした外交を展開していたといえよう。 事協定としての性格が格段に強くなった。 考えられる。 以上、述べてきたように、武田・本願寺間の外交関係における転換点は、 信虎・証如の代と比較すると、 これは、 しかしこれは、 信玄・顕如の代には長尾氏という共通の敵対勢力が存在したことを契機に軍 戦国大名間にみられる軍事協定と差異はなく、 本願寺との友好関係が長かった武田氏が相手だったからこそ 永禄三年の長尾景虎による越中侵攻であると 本願寺が勢力維持を目

武田・本願寺と織田信長

浅井・ 津で抵抗を続けていた。 三人衆は将軍足利義輝を暗殺して義栄を擁立したが、 0 元 一敵対を表明するが、 亀元年 たからではない 六角氏と本願寺が密接な関係にあったことに注目し、 (一五七〇) ・かと指摘している。 になると、 神田千里氏は、 一方の織田氏は摂津にて三好三人衆 本願寺と織田信長の対立、 また、 本願寺が織田氏に戦いを挑んだ理由として、三好三人衆と本願寺が親密な関係に 元亀元年以降、 永禄十一 本願寺が織田氏に蜂起するために諸大名と同盟関係を結んで (三好政康·三好長逸·石成友通) 年に足利義昭を奉じて上洛した織田氏に京都を追わ すなわち石山合戦が始まった。 \equiv |好三人衆に連動して織田氏と足利義昭に敵対した朝 同年九 を攻撃中であった。 月、 本願寺は織 田

偏御思慮之外無候、

たと述べている。

これを容認していた。 方、 武田氏は永禄八年頃より織田氏と同盟関係にあり、 元亀三年 (一五七二) になると、 顕如は信玄に対し、 永禄十一年に信長が足利義昭を報じて上洛した際も、 本願寺が織田氏と本格的に敵対している旨を 信玄は

史料五 本願寺顕如書状案 (龍谷大学所蔵 顕如上人御書札案留 戦武四○四五

報じるようになる。

聊表音問 其聞候、 厥后莵角打過様候、 計候、 随而彼軍兵等被相支之、 就中今般信長働無其隱事候歟、対当寺条々無謂次第、 連年異于他申談之儀、 其上当寺属本意様御調略併可為快然候、 今以弥御入魂本懐候、 仍太刀一腰吉包 不能申展候、 巨細難尽紙面候、 今春令上洛、 腰物兼光・黄金五十両推進之候、 長延寺・竜雲斎可申入候 摂・ 河表可出馬之由

猶上野法眼可令申候、 御判無之、」

(穴賢)

徳栄軒

正月十四

ほしいと要求している。 が今春上洛して摂津・河内に侵攻するという風聞があることを受け、信玄に対し本願寺の本意に沿うよう信長を牽制して 顕如は信玄に対し、 信長が本願寺に対し軍事行動を働き、 畿内での戦況が思わしくないことが史料からうかがえるが、 要求を条々にして突きつけてきたと伝えている。 本願寺が窮地に立たされていたのは また、 信長

畿内だけではなかった。

本願寺顕如書状案 (龍谷大学所蔵 「顕如上人御書札案留」 戦武四〇四六)

同島

長尾事、 当春越中表可出馬由其聞候、 仍椎名身上之儀、 別而御扶助之事候、 猶以於被加貴意者、 此方本望候、 様体長

四〇四七)。おそらく、

勝頼が武田家当主となった後も好を通じたいと考えていたのであろう。

力の連携の礎となっていくのである。

延寺・竜雲斎可申伸候、 委細上野法眼可啓入候、 (光佐)

正月十四日

子勝頼に対しても同日付で書状を送り、太刀一腰・金子などを進上している いる状況にあり、 に立たされた椎名康胤を救援するよう信玄に要請している。 この史料は、 先に挙げた史料五と同日付で発給された書状である。 その状況を打開するために武田氏との同盟関係を重視していたことがわかる。 史料五・六の内容から、 顕如は書状の中で、 (龍谷大学所蔵 本願寺は織田・上杉両氏と敵対して 上杉氏の越中侵攻に伴 顕 その 如上人御書札案留」 ため、 顕 如は信玄の って窮地

寺へ との連絡路を確保するために遠藤氏を味方にしようとしたと考えられる。こうして、 四〇五〇)、信玄は美濃郡上(岐阜県郡上市) 五月になると、 (「安養寺文書」戦武一八九七)。信玄は安養寺に対し、 の懐柔を依頼していたのであろう。 顕如が信玄に対し、 越中の情勢に注意するよう求める一方 郡上は越前に隣接する地域である。 の安養寺を通じて、織田方であった国衆遠藤氏を味方につけようと働きか 本願寺と申しあわせていると伝えていることから、 信玄は、 (龍谷大学所蔵 武田 織田氏との敵対を想定し、 本願寺間 「顕如上人御書札案留」 の同盟は、 顕如に安養 反織 朝倉義景 戦武 田

止した 行われることとなった。 七月になると、 (「専福寺文書」 信長は織田領国内の本願寺門徒に対し、 信長三三〇)。 織田 本願寺間の対立が深まる中、 本願寺が天下に対し謀反を企てたとして、 九月には本願寺・ 織田間で和睦に関する談合が 大坂への出

史料六 本願寺顕如書状案 (龍谷大学所蔵 「顕如上人御書札案留」 戦武四〇五二)

鳥

顕如は織田氏に対抗すべく、

調略を行っていたのである。

就 不 -可有 信機田 贔 当寺和平之儀、 **屓偏頗之御調略候之条、** 為 武家被下置御使者、 従是旨趣以使者可申展候、 信玄可有入魂趣、 委細賴充法眼可令申候間、 被仰出 由候、 対信長遺恨深重候、 不能詳候、 雖然貴辺之儀

(光佐)

九月十日

法性院殿

書状の中で顕如は、

此 御 札 信玄より大かた案文到来候畢、 内証有子細此 分也

信長と本願寺の和平が信玄の仲介によって成立したと述べているものの、信長への遺恨が根深いと

てい 本願寺間 胸 の内を漏らしており、 る²¹ この仲介は、 0 和睦仲介を行うつもりはなく、この活動を通して本願寺との同盟関係を強化させることが目的であったと述べ 武田氏が織田・本願寺双方と同盟していたために実現したものであったが、 本願寺のために調略を行うよう信玄に要求している。この点について柴裕之氏は、 実際は水面下で信玄と 信玄は織田

させ、 合戦で徳川氏に勝利すると、 に敵対するよう求めた 仍如御兼約、 月になると、 上杉氏に対抗するよう要請し 遠州表御出馬之儀、 武田氏は徳川家康の領国である遠江への侵攻を開始 (「南行雑録」 顕如は信玄に祝意を示した(龍谷大学所蔵「顕如上人御書札案留」 尤珍重候」という文言があり、 戦武一九六四等)。また、越中の勝興寺に対しては、 (「勝興寺文書」戦武一九六六)、 武田氏の遠江侵攻が本願寺との約定のもとに決行された 信長を牽制した。そして十二月、 Ü 越前の朝倉氏と北近江 越中・加賀 戦武四〇五三)。 の浅井氏に対 <u>の</u> 武田氏が三方ヶ 向宗門徒 Ĺ 書状には を蜂 織 田 氏

てい が、 元亀四年 この る 、龍谷大学所蔵 四ヶ国」 (天正 売・ とは、 頭如上人御書札案留_ 五七三)になると、 遠江 ・三河・尾張・美濃のことである。それを示すのが、 顕如は信玄に対し、 戦武四〇六二)。 顕如 四ヶ国門下之族可致其働由 がが 四ケ Í の門徒に蜂起を促したと述べているのだ 次の史料である 甲越 候」 と記した書状 を送っ

ことがわかる。

「自信玄遠・三・

尾・濃門下之輩働事」

とあることから、

遠江・三河

尾張・美濃の

向宗門

徒であることがわ

信玄は一

向宗門徒

の蜂起を伝えることにより、

朝倉氏が織田氏に対峙するようさらに働きかけたのである。

史料七 本願寺顕如書状写 (龍谷大学所蔵「 顕如上人御書札案留 静五九〇)

鳥

候間、 細 存知浅備無人ニ付而、 勢為押、 濃州之内ニ新要を相構、 別紙之御状令披覧候、 計此事 々信玄直札 其遅速之段者不及了簡候、 加州衆罷立候処、 到来、 飛脚等上下 自信玄遠・三・尾・濃門下之輩働事、 門下之者竭粉骨様候、 日根野備中守入置候、 輝虎自身令出馬、 度々事候間、 三州之儀も、 万端申談候、 于今彼表ニ在陣候、 猶委細下 岐阜と其間三里有之所ニ候、 勝万寺近日令進発由申来候、 間上野可申入候、 於遠州表極月廿二合戦、 貴辺へ被申越由承候、 随分方々申 右之通以御分別可有演説事専用候、 一付候、 日々及行由候、 濃州表之儀者、 甲 切々申付様候、 聊無油 -州衆無比類働、 断 候、 将亦越中表之儀者、 旧冬勢州長島より 次江北表之儀 雖然時宜見合儀に 不及是非次第候 此方へも 伸付 越後 如 御

正月廿七日 尚追々可申 展候、

左衛門督殿

で織田軍と対峙していた朝倉氏が軍勢を撤収させたことに、 いて信玄は、 これら四ヶ国は織田 「貴辺へ被申越由承候」とあるように、 徳川領国を指し、 四ヶ国内の一向宗寺院に対し、 顕 如から朝倉氏に伝えるよう要請している。 信玄は抗議していた 顕如は蜂起を促したのである。 (「伊能家文書」 三方ヶ原合戦後、 戦武二〇〇七)。 このことにつ そのた 北近江

てるため、 揆は岐阜から三里のところに砦を築き、 次に、 史料中にある各地の動向を見てみると、 加賀一 向 揆が応戦しているもの 斎藤旧臣 0 三河では勝鬘寺 の日根野弘就が防備にあたっている。 謙信みずから出陣しているため、 (愛知県岡崎市) が蜂起に向けて準備をし、 油断ならない状況であった。そして、 一方、 越中は上杉 軍が侵攻してき 長島 向

である。

218 北近江については守備が心許ないため、 反織田勢力として軍事行動に期待したのである。 本願寺が門徒に檄を飛ばしている。 顕如は、 こうした本願寺勢の動向を朝倉氏に

倉氏は、三月十一日に越前府中まで進軍したが、織田軍を牽制するまでに至らなかった(「反町英作氏所蔵文書」上越一一 玄は野田城 の催促で遠江に侵攻したものの、朝倉氏が撤退したために好機を逃したと述べている(「万代家手鑑」戦武二〇二一)。信 朝倉氏に期待を寄せていたのは、 (愛知県新城市)を陥落させたものの、朝倉氏との連携が取れずに不満を募らせていたのである。 武田氏も同様であった。二月、信玄は足利義昭の側近に書状を送り、 本願寺と朝倉氏 その後、 朝

応えなかった。 こうして、織田 武田氏と本願寺は他勢力との連携もままならないまま、 ・徳川両氏と敵対すべく、朝倉氏との連携を重視していた武田氏と本願寺であったが、 織田・ 徳川両氏と対峙しなければならなくなるの 朝倉氏は期待に

Ξ 武田氏と長島一向一揆

寺との同盟関係を維持し、 元亀四年四月、武田信玄が死去した(『上杉家覚書』上越一一五二)。信玄の死後、 織田・徳川両氏と対抗していくことになる。 家督を継いだ勝頼は父と同様に本願

先述したように、 勝頼は信玄の生前より顕如と音信を交わしていた。元亀元年には、顕如が勝頼に入魂の意志を伝え、

太刀一腰と馬一疋、 紅糸三斤を贈っている (龍谷大学所蔵 「顕如上人御書札案留」戦武四〇四二)。

頼に祝辞を述べている(龍谷大学所蔵「顕如上人御書札案留」戦武四〇七七)。ところが、信玄が死去して五ヶ月ほど経過 そして、信玄が死去してからは、 同年(天正元年)九月に勝頼が武田の家督を正式に継いだ旨を顕如に伝え、 信玄は亡くなる直前、

自らの死を三年間は秘匿とするよう勝頼に命じたといわれている(『甲陽軍鑑』)。

しかし、

朝

る していたにもかかわらず、 同 戦武四〇七五)。 また、 顕如は信玄宛の書状も発給しており、そこでも勝頼の家督相続について祝いの言葉を述べてい 顕如は同日付でもう一通、 すでに亡くなっている信玄に宛てて書状を送っている。

史料八 本願寺顕如書状案 (龍谷大学所蔵「顕如上人御書札案留」 戦武四〇七六

申入候、 追 而令啓達候、 委細八重森因幡守可被申候、 仍遠・三表之御備如何候哉、 江 北 越前其外近国、 弥無正体式候、 随而上野法眼 ニ申付旨 趣、 以一

書

月 日 (光佐)

氏が滅亡したことに言及している。 か尋ねているといってよい。 顕 が如は、 信玄に遠江・三河の守備について訊くとともに、 表面上は信玄に宛てているが、 「江北 ·越前其外近国、 実際には顕如が勝頼に対し、今後どのように対応する 弥無正体式候」と述べ、 浅井

亡くなった元亀四年四月、 実であると判断している (「赤見文書」上越一一六一)。 ると伝えており(「上杉家文書」上越一一五二)、五月には徳川家康が駿河へ侵攻したことを知った謙信が信玄の死去は確 史料八が発給された九月の段階で、 飛騨の国衆江馬氏の家臣河上富信が上杉家臣河田長親に対し、 顕如が信玄の死を知っていた可能性は極めて高い。 武田領国周辺において、信玄死去直後に情報が流 信玄が病死した噂が出 信玄の 死が、 布してい 武 田 回 Iってい 本願寺 たとな

信玄の死と浅井・ 朝倉両氏の滅亡、 さらに七月には足利義昭が信長によ って山城を追放される事件が発生してい たこと

219 から(『信長公記』)、武田・本願寺をとりまく環境は厳しくなっていった。 信玄の死後、 武田氏は奥三河の攻防で劣勢に立

うに対応したものとみられる。

を窮地に追い込むことは顕如も想定していたのであろう。そのため、

勝頼の要望にあわせて、

信玄が生存してい

るか

から、

た。

成寺文書」戦武二一七七等)。一方、本願寺は十一月にいったん織田氏へ和睦を申し入れた(『信長公記』)。 たされ、奥平氏が徳川氏へ離反し、長篠城 (愛知県新城市)を奪われるなど、その影響が次第に現れるようになった(「本

の勢力圏となったことで、 美濃に向かったが、 恵那市)に入ると、 しかし、天正二年(一五七四)になると、武田氏と本願寺は攻勢に転じた。一月、(3) 織田氏に帰属する遠山氏の明知城 明知城で内紛が起きたことをきっかけに、 織田氏は本拠の岐阜を脅かされる危機に晒されたのである (同)攻略を開始したため、織田信長・信忠父子は援軍を率 明知城は武田氏に降伏した(『信長公記』)。 勝頼は自ら出陣して岩村城 東美濃が武田氏 (岐 覧阜県 て東

神田千里氏は、この時の両者の軍事行動について、 そして、武田氏が東美濃に侵攻した頃、越前一向一揆が蜂起し、さらに四月には本願寺が大坂で蜂起した(『信長公記』)。 足利義昭の影響があった可能性を示唆している。(四) 前年に足利義昭を擁して織田信長に叛旗を翻した勢力が蜂起したこと

に救援を要請し、 原氏は、 五月になると、 武田へ寝返るか徳川に残るかで家中が分裂しており、 武田氏は遠江の高天神城 信長・信忠父子は援軍に出たが、六月十一日に高天神城は降伏してしまい、そのまま岐阜へと引き返し (静岡県掛川市)を攻撃した(「巨摩郡古文書」戦武二二八八等)。 武田氏はそこへ軍事介入をしたのである。 徳川氏は織 城主 の小笠 田氏

ŋ 本願寺にとって対織田戦における最重要拠点であった。 そして、織田軍の長島侵攻の報せを受けた顕如は、 岐阜へ帰還した信長は、七月に長島一向一揆への攻撃を開始した(『信長公記』)。長島一向一揆の中心である願証寺は、 元亀三年十一月、武田氏は本願寺に長島一向一揆を蜂起させるよう催促した(「徳川黎明会所蔵文書」 武田氏に救援を要請し、 武田氏も、 織田領国を挟撃する上で願証寺との連携を重視してお 勝頼は次のように回答している。 戦武一九九〇)。

武田勝頼書状 (第二回 『西武古書大即売展目録』 戦武二三三九

織田至長島張陳、 因茲後詰之儀、 従貴門領御催促候、 最年来之申合筋目、 又願証寺へ云入魂之意趣、 更非可被見除候

勝

頼は願証寺との関係を強化しようとしたのだろう。

勝頼は自らの遠江侵攻についても言及している。

遠江侵攻とは、先の高天神城攻撃を指すが、「為御申合遠州出

出

歟、 出 馬遅々無念至極候 但今夏信長向其口、 雖然涯分催人衆候之条、 動干戈候之条、 為御申合遠州出張、 近日尾 ・三表へ可及行、 永々在陣、 至于去月下旬帰鞍、 於門主御前 此等之趣、 諸卒不得休其労候之間 御取成可 為祝着候

如 此候之間 門跡御助成様、 貴辺添意候、 恐々謹言

八月廿四日

上野法眼知 (下間賴充)

御

房

随

而荒木島表へ取出候之処、

被及一戦、

凶徒百余人被討留之由

心地好候、

猶長島へ後詰、

聊無由断候、

入于念候

勝頼 花 押

口 章

いう。 く御りやうにさま、 之意趣」という文言から、 勝頼 似は書状 本願寺勢力の中で、武田氏と軍事的に連携が取れるのは、 0) 中で、 伊勢の長島へさへ信玄公御こしあるべきと定らる、」とあり、 織 田軍の長島侵攻に伴い、 武田氏は願証寺と直接交渉を行っていたようである。 本願寺から援軍を要請されていたことにふれているが、「願証寺へ云入魂 織田領国に隣接する長島一 『甲陽軍鑑』には「信玄公御むすめごおき 勝頼妹が願証寺に嫁ぐ計画もあったと 向一 揆であった。そのため

を攻略するまでに一ヶ月ほど時間を要したことを示している。そのためか、勝頼は書状の中で「諸卒不得休其労候之間(w) とあるように、 [馬遅々無念至極候] と述べており、兵の疲弊によって長島への出陣が遅れたことは無念であると弁明し、近日中に尾張 武田氏が本願寺と申し合わせた末に遠江へ侵攻していたことがわかる。「永々在陣」とあるのは、 高天神

と同 三河へ兵を出す予定であるとしている。 時に織 田 徳川 **〔領国を挟撃する予定だったのだろう。** 勝頼としては、 高天神城を迅速に攻略し、 武田氏が明知城を攻略 した際、 そのまま三河へ進軍して長島一 同 .時期に越前 向一 揆が蜂起し 向一揆

てい ることからも、 勝頼が本願寺との連携のもとに軍事行動を起こしていた様子がわかる。 及ぼすのである

こうした勝頼の軍事行動について、

だろう。しかし、 |越一二一三)。信長としては、遠江方面の防衛は家康に任せ、自身は長島や畿内といった西へ矛先を集中させたかったの 予想を超えて武田氏は織田・徳川領国を脅かしてきた。その背景には、 信長は上杉謙信に対し、「油断できない」と述べている(「今清水昌義氏所蔵文書 本願寺の存在がある。武田氏と

本願寺の連携を分断するために、信長は長島一向一揆への攻撃を決めたのである。

証寺が敵方の隠匿や年貢の滞納などを行っていることを織田氏が非難したことに由来するとしている。 で知られるが、これについて神田千里氏は、願証寺が「守護不入」の特権を獲得して聖域の資格を有していたものの、 そして九月二十九日、長島一向一揆は壊滅した(『信長公記』)。長島一向一揆は、織田軍によって大量殺戮を受けたこと

からであった(「滝口家所蔵文書」戦武二三七四)。長島一向一揆の壊滅は、その後の武田・本願寺の連携に多大な影響を これまで述べたように、勝頼は長島救援を目的とした三河・尾張方面への侵攻を本願寺に約束していたが、実現しなかっ 高天神城攻略に時間を要した分、 戦後処理に時間がかかったのだろう。 武田氏が遠江に侵攻したのは十一月に入って

長篠合戦以降の武田氏と本願寺

四

城 天正三年 (同豊橋市) (一五七五 を攻略した(「孕石家文書」戦武一七〇四等)。 四月、 武田氏が奥三河への侵攻を開始し、 足助城 (愛知県豊田市)・野田城 (同新城市)・二連木

十一日に合戦に至った(『信長公記』、『当代記』)。 の重臣が戦死した(『信長公記』、「永青文庫所蔵文書」愛一一〇三等)。 そして五月一 Ħ 武田勝頼は長篠城を包囲し、その報せを受けた織田 長篠合戦の勃発である。 この合戦で武田軍は大敗を喫し、武田氏の多く 徳川連合軍は十八日に設楽ヶ原に陣を張り、二 重視し、

奥三河侵攻を決行した結果、

長篠で敗戦したのである。つまり、

長島一向一揆の壊滅が、

長篠敗戦の遠因となっ

力や本願寺との連携による対信長牽制であったと述べている。さらに金子拓氏は、 援軍に向かった対武田戦において、 侵攻が本願寺の後詰であったと指摘している。また、長篠合戦については、本願寺を主たる敵として戦いたかった信長が けたため、 信長の 信長が上洛して大坂を攻めることがあれば、後詰を第一として行うと述べていたことに注目し、 その名誉挽回のために長篠城奪還を目指したとしている。また柴裕之氏は、武田氏の三河侵攻は、 大軍に向かう術もなく結局見殺しにするほかはなかったとし、 戦力消耗を避けるためにとった戦術が逆に勝利を呼び込んだとしている。 長島を見殺しにしたことで武田氏は武威を傷つ 勝頼が越前にいた本願寺方の杉浦! 勝頼の奥三河 畿内の諸

連の武田氏による三河侵攻について佐藤八郎氏は、武田氏にとって長島一向一揆の援助は面目上からも必要であった

長が長島一 ていた。そのような中、 織田領国 ならば、長篠で武田氏が大敗した要因についてであろう。これまで論じてきたように、勝頼は本願寺と頻繁に連絡を取り、 このように、 の挟撃を目指してきた。勝頼が軍事的にもっとも頼りとしたのが長島一向一揆であり、 向一揆を壊滅させたことで、 長篠合戦と本願寺、 勝頼は天正二年に東美濃や遠江に侵攻したものの、長島一向一揆との連携が上手く機能せず、信 あるいは石山合戦との関連は、 武田氏は軍事的に厳しい状況に追い込まれた。それでもなお、 先行研究でも指摘されている。これらの説に補足する その点は本願寺も熟知し 本願寺との連携を

長篠で大敗を喫した武田氏は、 翌六月に武節城 (同豊田市)、七月には光明城 (静岡県浜松市天竜区) を (「野崎達三氏

城を織田軍に攻撃され、 所蔵文書」愛一一一 武 田 民 敗 戦が続く中、 足利義昭を保護した毛利輝元が織田氏に敵対を表明したことによるものであった。これらの経緯につい 四 勝頼自ら岩村城救援に向かったが、 八月には諏訪原城 天正四年(一五七六)四月、今度は本願寺が挙兵し、石山合戦がふたたび勃発した(『信長公記』)。 (静岡県島田市) 軍事力が不足して農民を動員したこともあり、 を徳川軍に奪われた(『当代記』)。 さらに十一月には、 敗北した。

てい ては、 書状を送り、武田・北条・本願寺と和睦するよう求めた(「謙信公御書集」上越一二七四等)。 義昭が深く関与していたことが改めて確認された。同年五月、 る 近年新出史料が丸島和洋氏によって紹介され、 (「歴代古案」上越一二八八等)。義昭は、 織田氏と同盟していた上杉氏を味方にすべく、 武田・毛利同盟の成立過程が整理されるとともに、 義昭は武田・北条・上杉の三氏に和睦を求め、 結果、 前年の段階で上杉謙信に 上杉氏は織田 この同盟成立に 上洛を促し 氏との

こうした状況を受け、 勝頼は本願寺坊官の下間頼充に対し、次の書状を送っている。 同盟を破棄して本願寺と和睦したのである(「歴代古案」上越一二八八)。

史料十 武田勝頼書状 (切紙) (「岡家文書」戦武二六七九)

尾・ 旨候歟、 不可如之候、 為始原田備中守、 去月廿七日芳翰、 濃国中へ可令乱入候、 肝要候、 此上弥被鎮御備、 今月十六日到着、就中小次郎口説具再問、得其意候、抑織田、 然則不打置、 凶徒数千輩被討捕、 於此所者不可有御疑心候、 自貴門被及御催促、 毎事堅固之御仕置肝要存候、 門主被達御本意之由、 早々京表へ被比出、 随而芸州毛利方、 勝賴於御手合者、 目出珍重候、 奉対 諸口牒合信長押詰候様、 寔都鄙之御名誉, 公儀励忠節、 毛髮不可有猶予候、 向貴寺動干戈之処、両度被及御 近日御 難顕紙 御籌策極此 入洛、 涯分催人数、 面 候、 併当方吉事 可令馳走之 事候 無二

畢竟貴辺御肝煎専要候、 委曲釣閑 蒲庵 可申 候、 恐々謹言

下間上野法眼 六月廿二日

勝頼

(花押

御

進之候

述べている。 の上で、 勝頼 は 顕如に毛利氏の上洛を促すよう依頼し、 本願寺が織田軍と一 そして、 毛利氏が足利義昭に忠節を尽くし、 戦を交え、 数千の敵を討ち取ったことを祝し、 連携して織田氏を挟撃することが重要であると説いている。そして、九 近日中に上洛する予定であることについても言及している。そ 自らも尾張・美濃へ侵攻する予定であると 固にするとともに、

月十六日に勝頼は、 毛利輝元に次の書状を送っている。

武田家朱印状 [軍役条目] (切紙) (「万代家手鑑」 戦武二七二二)

条目

雖未申通候、 対奉対 公儀、 途二御忠節之由候之条、 自今以後、 貴国当方異于他為可申合、 以八重■森

申候、 御同意可為本望之事

向大坂織田取出之地利、数ヶ所相築取誥之由候、 自然至彼地不慮之儀出来者、 慥 公儀御入洛之障妨眼前候之条

大坂堅固之内、至京表御動座被指急、 御執持極此一件之事

付、 於当方者、 御一左右次第、 至尾濃三遠、 可令張陣之事

去頃大坂へ兵糧米被相移候之砌、 船軍御勝利御武勇之至、 無是非候事、

越・相・甲三和之事

付条々、

対貴国大友方辜負之由其聞候、

縦雖為御宿意、

重畳先被閣御野心、

有和睦、

御入洛御馳走専一ニ候之事

向後者、 相互行調儀等、 都鄙 同二可被相定事、

九月十六日(天正四年) (竜朱印

芸州江

織 |田軍が大坂の本願寺周辺に砦をいくつも築いて思うようにならないため、 条目には、 足利義昭に忠節を尽くし、今後は毛利・武田が申し合わせ、 同盟成立を望むと記されている。二条目には、 義昭上洛の妨げになる前に本願寺の守備を堅

毛利軍には早く京都を目指してほしいとしている。さらに、

毛利軍の動向にあわせて、

武田は尾張

利氏との同盟であり、

226

て五条目では は是非もないこと(同年七月の第一次木津川口の戦い)、四条目は、 三河・ 遠江に出陣する意向であることを示している。三条目は、 豊後の大友義鎮 (宗麟) との敵対について、 輝元には考えがあるとは思うが、 上杉・北条・武田の和睦について書かれている。 大坂へ兵糧米を移す際に毛利水軍が勝利 和睦して義昭を上洛させる した武勇 そし

ために努力することを求め、六条目では、今後については互いに協議して方針を定めていくとしてい

遠方のため不可能であった。そこで武田氏は、 寄せたのは、 武田 本願寺は、 越中や長島一向一揆であった。甲斐と摂津にそれぞれ本拠があった両者が、 長年にわたって友好関係を維持し、 各地の一向一揆と連絡を取るとともに、 上杉氏や織田氏と敵対してきたが、 彼らが味方するよう本願寺に依頼 直接的に軍事協力をするのは 武田氏が軍事 面で最 も期待を

することで、 武田氏は長篠合戦や東美濃・奥三河などで敗戦が続き、 戦況を優位にしようとしたのである。 しかし、 厳しい状況になった。その打開策として打ち出されたのが毛 織田氏に対抗する最大の一向一揆であった長島が壊滅 して以

毛利氏が保護する義昭の要求に応えるかたちで、織田氏への敵対を強めることであった。

軍へ 里氏は、 て、 田氏や神田 戦国期 の奉公とを一 将軍との安定的な関係を維持した方が有利であると判断した場合、 足利義昭は大名同士の抗争を、 時に将軍は諸大名に停戦令を出し、 氏が指摘するような意味も含まれていたといえる。 体のものとみなす論理に基づいていたと述べている。武田・本願寺・毛利の三者が連携した背景には(※) 将軍に奉公すべく諸大名が上洛することに対する障害とみなし、 和睦するよう促していた。 上意に従っていたと指摘している。また、 山田康弘氏は、 大名が領国を保全するに 抗争の停止と将 あ 田 たっ

Ш

方で越甲相

(上杉・武田・北条)

0)

和睦は実現しなかった。

勝頼は一色藤長宛の書状の中で、

義昭

上洛を

国無事之儀、 也氏所蔵文書」 支援するため、 是者謙信存分之旨候間、 織田・ 戦武二七二五)、 徳川領国に侵攻する意向であることを伝え、 上杉・北条間の対立は収まらなかったのである。 於越・甲計者可応 上意候歟、 越甲相の和睦に前向きであると述べていたが 相州於可被差添者、 河田長親・直江景綱連署状には、 被致滅亡候共、 亦得御勘当候共 (「高橋琢 佐竹氏を通じて織田氏との和睦を試みるが

(「歴代古案」戦武三七○○)、実現には至らなかった。

がわかる 無二存切候事」とあり、 (「楢崎憲蔵所蔵文書」上越一三一〇)。 謙信が武田との和睦は構わないが、北条との和睦には応じることができないと主張していたこと

の音信も減少した。また、 このことが影響したのか、武田・毛利間の軍事協力は目立って行われず、天正五年(一五七七)以降は武田 丸島和洋氏によると、 武田・毛利同盟はあまりに遠方である上、 敵国織田領国を使者が通過す 本願寺

たほか(「富永家文書」戦武三一六〇)、常陸の佐竹義重とも同盟を成立させ(「紀伊国古文書所収藩中文書」戦武三一七六)、 江をめぐる武田氏の攻防は次第に劣勢となっていった。そこで勝頼は、妹菊姫を上杉景勝に嫁がせ、 (氧) 条氏から反感を買い、 なった。そして、天正六年に上杉謙信が死去し、御館の乱が勃発すると、 る必要があったため、うまく相手国にたどり着けず、意思疎通の円滑さを欠くこととなったという。 こうした事情を受け、 天正七年には武田・北条間の同盟が崩壊した。その上、 武田氏は遠江の高天神城を中心に防備を固め、 織田軍ではなく徳川軍との戦闘に集中するように 勝頼は景勝・景虎の和睦仲介を行うものの、北 徳川・北条間で同盟が成立したことで、遠 甲越同盟を成立させ

領国挟撃における最大の協力者を失ったのである。これを契機として、信長は武田領国への攻撃を本格化する。 (光寿)も本願寺を退去し、石山合戦は終結した(『多聞院日記』、『信長公記』等)。石山合戦の終結により、 そして天正八年 (一五八○)四月、 織田氏と和睦した顕如が本願寺を退去し、八月には抵抗を続けていた顕 武田氏は織田 如 の子 この頃

れを許さなかった。 軍を出して高天神城を攻撃し、翌九年に落城した(『家忠日記』)。 一の足がかりにしたという。 平山優氏によると、 信長は「勝頼が高天神城を見殺しにした」との情報を流布することで、 高天神城からは降伏の願いが出ていたものの、 武田氏滅 信長はこ

家康は高天神城を攻略するために砦を複数築いていたが、そこに信長は徳川本陣に検分の使者を送るとともに、

遠江へ援

織 田 徳川両軍による武田領国侵攻は、 天正十年 (一五八三) 一月より開始され、 木曾義昌の離反によって武田 軍は崩

武田氏は滅亡した。

れ、 目山 石 「山合戦が終結したことにより、 信君が織田方へ寝返り(『信長公記』)、三枚橋城 仁科盛信が守る高遠城 (同甲州市) に逃れた勝頼は、 武田領国は織田 (長野県伊那市)は三月二日に落城した ・徳川・北条の三軍に攻撃された。そして三月十一日、 武田氏は本願寺という同盟相手を失い、 正室桂林院殿や子信勝らとともに自害し、戦国大名武田氏は滅亡した(『信長公記 (静岡県沼津市) が北条軍によって落城するなど(「三上文書」戦北二 (『家忠日記』、『信長公記』等)。二月には江尻城 滅亡の一途をたどったのである。 新府城 (山梨県韮崎市) を放棄して天 の穴

おわりに

篠合戦での大敗に至った。 勝頼は顕如との協力関係を維持するも、 諸勢力に織田領国への攻撃を呼びかけた。 間には上杉氏という共通の敵を持つことで軍事同盟と発展した。その後、 以上、 戦国大名武田氏と本願寺の関係について検討してきた。 勝頼と顕如は、新たに毛利氏と同盟することで再起をはかったが、結果的に石山合戦は終結し、 長島一向一揆が壊滅したことで織田軍からの攻撃を大きく受けることにより、長 しかし、 信玄の死も相まって諸勢力との連携は上手くいかなかった。 両者の関係は、 元亀年間に武田・本願寺は織田氏と敵対すると、 武田信虎と証. 如の友好関係から、 その後 永禄年

武田氏は戦況を優位にしたのであり、そのために本願寺と頻繁に音信を交わしたのである。特に長島一向一揆は、武田 田氏と敵対する際は長島一向一揆や美濃郡上の安養寺に使者を送り、 同盟相手であった。 武田氏にとって、 それを実現していたのが各地の一向一揆であったのである。 互いの本拠が遠方であるにもかかわらず、 本願寺は畿内における最も有力な同盟相手であり、 両者は共通の敵と対峙したことから、 武田氏は、 連携を深めた。 本願寺にとって武田氏は東国における最 上杉氏と敵対する際は越中 各地の一向一 揆と連携することで、 軍事協力を行う関係 向 一揆、 も有力な

した大名が一

向一揆と対立していたのも、そうした状況が影響していたのである。

中心とする室町幕府の秩序の克服でもあったのである。

註

各地の一 織田氏を牽制するまでに至らなかった。 運を大きく左右した。 本願寺双方にとって、 向 揆が武田氏の軍事行動に連動することができたからに他ならない。 天正四年には、 対織田戦における最前線であった。そのため、 武田・毛利同盟が成立したものの、 武田・本願寺の友好関係が、 長島一向一揆の壊滅が、 遠方にもかかわらず長年にわたって機能したのは、 互いが遠方だったために軍事協力がままならず、 上杉・ 織田・ その後の武田・本願寺の命 徳川といった武田氏と対立

らず、 を防衛しつつ義昭を支持する対外勢力と戦わなければならなかった。そこで信長は、 昭を報じて上洛した信長は、 「信長包囲網」も、 対する織田氏にとって、 それが長島 武田・本願寺が毛利氏と同盟した際も、 向 一揆の壊滅につながったということになろう。 武田・本願寺の連携は脅威であり、 畿内を統一する過程で義昭と対立を深め、 対織田勢力は義昭の名のもとに集結していた。 その背景には足利義昭の存在があった。 織田氏にとって、 天正二年に義昭を京都から追放してからは、 武田・本願寺の連携を分断せ 武田・ 本願寺との対峙は、 元亀年間 永禄十一年に義 13 義昭 における ねばな 畿内

力が弱まったの を西へ向 応えた。元亀三年より始まった武田氏の徳川領国侵攻は、 田氏は、 けたの 石山 は が織田氏による長島 合戦の勃発に伴い、 本願寺との同盟が根底にあり、 向一 同盟していた織田氏と手切し、 揆の壊滅であり、 その契機は石山合戦にあったといえるだろう。そして、 そうした事情から引き起こされたものであった。 やがて長篠合戦の敗北へとつながったのではないだろうか。 本願寺を支持するとともに義昭からの支援要請 この 武田氏が矛先 同

$\widehat{1}$ 柴辻俊六・黒田基樹・ 丸島和洋編 『戦国遺文 武田氏編』 (東京堂出版、二〇〇一~二〇〇五年)。 以下、 戦武と略記する。

 $\widehat{10}$

- 2 北西弘編 『一向一揆』真宗史料集成第三巻(同朋舎、一九七九年)。
- 3 『甲陽軍鑑大成』 第一巻・本文篇上(汲古書院、 一九九四年)。
- $\widehat{4}$ 佐藤八郎 「武田氏と一向宗」(『甲斐路』二九・三〇、一九七六・七七年)。

水谷安昌「東国戦国大名と一向宗―後北条氏・武田氏と一向宗をめぐって―」(地方史研究協議会編

『甲府盆地―その歴史と地域

性』雄山閣出版、 一九八四年)。

5

- 6 神田千里 『一向一揆と戦国社会』(吉川弘文館、一九九八年)、同 『戦争の日本史14 一向一揆と石山合戦』 (吉川弘文館、二〇〇七
- 7 山田康弘「戦国期本願寺の外交と戦争」(五味文彦・菊池大樹編 『中世の寺院と都市・権力』 山川出版社、
- 9 8 金子拓「長篠の戦い後の織田信長と本願寺」(『白山史学』五三、二〇一七年)。 金龍靜『一向一揆論』(吉川弘文館、二〇〇四年)。
- 1〇〇六年)等。

平山優『川中島の戦い』上・下(学習研究社「学研M文庫」、二〇〇二年)、同『武田信玄』(〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館

- $\widehat{11}$ 12 註(10)。 『上越市史』別編1 上杉家文書集一 (二〇〇三年)。以下、上越と略記する。
- 13 註(4)。
- 14 『上越市史』 通史編2 中世 (二〇〇四年)。
- 15 註(7)。
- 16 註(8)。
- $\widehat{17}$ 註(6)。

○八年)。

- 18 拙稿「武田氏の外交と戦争―武田・織田同盟と足利義昭―」(平山優・丸島和洋編 『戦国大名武田氏の権力と支配』岩田書院、二〇
- 19 拙稿「美濃国郡上安養寺と遠藤氏」(戦国史研究会編 『戦国期政治史編集 西国編』岩田書院、 二〇一七年)。
- 20 奥野高広『織田信長文書の研究』上巻(吉川弘文館、 一九八八年)。以下、 信長と略記する。

231

- $\widehat{21}$ 柴裕之「長篠合戦再考―その政治的背景と展開―」(同 『戦国・織豊期大名徳川氏の領国支配』岩田書院、二〇一四年。 初出二〇一
- (22) 『静岡県史』資料編8 中世四 (一九九六年)。以下、静と略記する。
- $\widehat{23}$ 拙稿「武田 ・織田間の抗争と東美濃―元亀・天正年間を中心に―」(『武田氏研究』 五三、二〇一六年)。
- 註(6)。

26

長島一

向一

揆と願証寺に関する論考として、

重松明久「織田政権の成長と長島一揆」(『名古屋大学文学部研究論集

史学二』 一九

25 と地域社会』 拙稿「武田氏の戦争と境目国衆―高天神城小笠原氏を中心に―」(小笠原春香・小川雄・小佐野浅子・長谷川幸一『戦国大名武田氏 岩田書院、 二〇一四年)。

年)、中野和之「願証寺の成立」(『真宗研究』四二、一九九八年)、同「願証寺の系譜」(新行紀一 五三年)、稲本紀昭 「織田信長と長島一揆」(浅尾直弘教授退官記念会編『日本社会の史的構造 近世・近代』 編『戦国期の真宗と一向一 思文閣出版、

弘文館、二〇一〇年)、播磨良紀「織田信長の長島一向一揆攻めと「根絶」」(同)等がある。

27 菊姫 (大儀院殿) は、 天正七年 (一五七九) に上杉景勝に嫁いでいる (「富永家文書」戦武三一六○)。

- 28 註 (25)。
- (29) 註(6)。
- 1 (30) 『愛知県史』資料編11 織豊1(二○○二年)。以下、愛知と略記する。
- (31) 註(4)。
- (32) 註(21)。
- (33) 註(9)。
- 34 35 天正元年七月に義昭が信長によって京都から追放された際、毛利氏は織田氏との戦闘を回避するため、義昭の毛利領国入りを拒絶 拙稿「武田・ |田間の抗争と東美濃―元亀・天正年間を中心に―」(『武田氏研究』 五三、二〇一六年)。
- 受け入れた毛利氏は副将軍となり、 氏と敵対することを決めた。これは、 しかし、 天正三年二月、 義昭が毛利氏に幕府再興のために尽力するよう求めると、八月に毛利氏は義昭を迎え入れ、 西国諸大名の上位に立つ正当性を確保した。この経緯については、 備中の国衆が織田・毛利のどちらに帰属するかで対立したことによるという。 山本浩樹 『戦争の日本史12

- 36 西国の戦国合戦』(吉川弘文館、二〇〇七年)、久野雅司『足利義昭と織田信長』(戎光祥出版、 丸島和洋「武田・毛利同盟の成立過程と足利義昭の「甲相越三和」 調定―すれ違う使者と書状群―」(『武田氏研究』 二〇一七年)を参照
- 37 四年)、同「足利将軍義輝の芸・豊和平調停」上・下(『政治経済史学』一〇二・一〇三、一九七四年)、山田康弘「戦国大名間外交と 足利義輝・義昭の停戦令に関する論考として、宮本義已「足利将軍義輝の芸・雲和平調停」(『國學院大學大学院紀要』六、 一九七

柴裕之「永禄期における今川・松平両氏の戦争と室町将軍―将軍足利義輝の駿・三停戦令の考察を通じて―」(『地方史研究』三一五 将軍」(『史学雑誌』一一二—一一、二〇〇三年)、同 『戦国時代の足利将軍』(〈歴史文化ライブラリー〉 吉川弘文館、

40 註(36)。 38

註(37)山田氏著書。

100五年)

等がある。

- 39 神田千里 織田政権の支配の論理」 同 『戦国時代の自力と秩序』吉川弘文館、二〇一三年。初出二〇〇二年)。
- 41 黒田基樹「遠江高天神城小笠原信興の考察」(同
- 42御館の乱時の勝頼については、丸島和洋「武田氏の外交における取次―甲越同盟を事例として―」(同『戦国大名武田氏の権力構 思文閣出版、 二〇一一年。初出二〇〇〇年)、同 『武田勝頼』(平凡社、二〇一七年)、平山優 『武田氏滅亡』(角川選書、二〇一

『戦国期東国の大名と国衆』岩田書院、二〇〇一年。初出一九九九年)、

註 25 。

- 七年)を参照
- $\widehat{43}$ 日記と戦国社会』(岩田書院、二〇一一年)を参照。 この点については『家忠日記』(『増補続史料大成19 家忠日記』臨川書店、一九八一年)に詳しいほか、 久保田昌希編
- $\widehat{44}$ 丸島和洋 「甲佐同盟に関する一考察―武田勝頼期を対象として―」(同 1000年)。 『戦国大名武田氏の権力構造』 思文閣出版、二〇一一年。 初
- $\widehat{45}$ "増補続史料大成40 多聞院日記3』 (臨川書店、 一九七八年)。
- 46 平山優 「武田勝頼の再評価」 (武田史研究会編『新府城と武田勝頼』新人物往来社、二〇〇一年)。